



第二中だより

No. 607

生徒数 527 名

令和 5 年 12 月 1 日

和光市立第二中学校

〒351-0106 埼玉県和光市広沢 1 番 4 号

TEL 048-462-1793

FAX 048-462-1890

<http://2chu.wako-city.ed.jp/>



「言葉の力」

校長 橋本 真

11 月が過ぎ、いよいよ師走を迎えます。令和 5 年も押し詰まってまいりました。月日の経つのは早いものだと思うのは、私だけでしょうか。

「所為」? 「せい」と読みます。「人のせいにする」の「せい」です。子どもたちだけでなく、大人ですが、人間は結構わがままで自分に原因があっても、自分の悪かったことは棚に上げて、つい、この「所為」を使ってしまうことがあります。私が、担任だった頃、受験に遅刻をしてしまって悲壮感に暮れていた生徒がいました。その遅刻の理由を尋ねたところ「親が起こしてくれるのを忘れてた」、「自分で目覚ましのセットを忘れていた」、だから、「起こすことを忘れていた親が悪い」と言い出しました。自分のことを棚に上げて、遅刻した理由を「親のせい」にしてしまっているわけです。似たようなことをした経験はありませんか。なぜ、人は「人のせい」にしてしまうのか。私自身も反省することがありますが、「人のせい」したほうが気が楽だという自分への甘えがそうさせているのだと思います。いつまでも他人のせいにばかりしていると信用を失ってしまいます。自分に厳しく、他人に優しい人になってほしいと思います。

言葉の力 先日、某新聞のコラムに目が留まりました。「忘る」と書いて「おこたる」と読ませている本を紹介したものです。「忘れる」という行為は、無意識的な行為の結果です。何かを忘れると、人は言い訳をします。「忙しかった」、「体調を崩した」など言い訳はいくつでも挙げられます。しかし、「忘る」

という読み方は、全く違うことでした。忘れてはならないことを忘れた、言い訳できない自分の怠りであることを実感するだけではなく、痛感するところに言葉の真意があるようです。言葉のちからについて改めて考えさせられました。

言葉で強くなる 各教室を巡ると、前面に心を奮い立たせる言葉が掲示されています。「座右の銘」です。常に自分の心に留め置いて、戒めや励ましとする言葉です。「座右」とは、皇帝が自分の右手側の席に、信頼できる補佐役を座らせた重要な席を指しているそうです。また、「銘」とは鐘や器などに刻む文体の一種で、自分自身の戒めや他人を賞賛する目的で刻んだものだそうです。皆さんも自分の目標や生き方を迷わず一直線に進めるよう「座右の銘」を決めておくとよいと思います。思い立った時、歴史に残る偉人の言葉や道標となる言葉と出会った時、書き留めて、机のそばに貼っておくとよいと思います。例えば、周囲に左右されずに一つのことに真っすぐ進んでいこうとするときは「一心不乱」、他人に自分の夢や目標を語って、頑張っていこうとするときは「有言実行」、全力で物事に当たるときは「全力投球」などの言葉があります。ある小説家は、「やってしまった後悔は少しずつ小さくなるが、やらなかった後悔は、だんだん大きくなる」、また、あるアスリートは、「過ぎた過去は、変えられないから今からできることをどうするか、考え、行動する」を座右の銘にしています。皆さんも、深く二学期を振り返り、自分なりの座右の銘をもって、三学期に臨んでください。